

仰ぎたる 山田真砂年

初湯して大きな浮力ありにけり
枯蓮の日当たりをれば賑やかに
昼過ぎの雪はザクザク音したり
仏舍利のやうな融雪剤散つて
清貧といふ冬ざれを歩きをり
小海線しなの鉄道枯の中
着ぶくれて象舎の前に仁王立ち
轉りや頬を豊かに渡来仏
白梅に鶯宿おうしゆくといふ名や閑かなり
茫茫々の雨に耕し富士裾野
春の苑キラキラネーム呼び合へり
仰ぎたる光の中に古巣かな
しらうをや灯の入る前の店に酌む
和布刈舟雲英きららの波間に見失ふ
富士見えぬ日のつづきをり桜に芽
坂を来て日陰の梅のよく匂ふ
春光の眠たき中を巨船ゆく
土筆摘み嫗はむかし語りをり
まばらなる菜の花貧乏くさい花
嘴を光らせ鴉花をゆく
玉砂利を禰宜の沓音落椿
ミモザ咲くゴツホの狂氣乱反射
百千鳥坂の途中に富士眩し
花馬酔木したたるほどに日を浴びて
春愁ふ植物園の明るさに